



静寂の楽園  
【第2章】



櫻宮まじゅ

【第1章はこちら】

<http://p.booklog.jp/book/107775/read>

翌日、目を覚ますともう既に正午を過ぎていた。寝過ごしてしまったようだ。隣で寝ていたはずの圭太の姿もなかった。

誰かと、ましてや男の子と1つのベッドで一緒に眠るなど碧衣にとっては初めての経験だったので、昨夜は緊張してしまい、眠りにつけたのは結局明け方頃だった。

(そういや、今日も学校があるんだった.....)

今から行けば当然、遅刻だ。いっそ今日は休めばいいか、と軽く考え、碧衣はベツトルームを後にしてリビングへと向かった。

広々とした家にも関わらず、人がいる気配が全くない。リビングに行ってみると、そこにも圭太はおらず、テーブルの上に1枚のメモ用紙が置いてあった。

『買い物に行ってきます』

(出かけてるのか.....)

メモを読んだ碧衣は、特に何をするでもなく、昨日と同じく部屋の隅に膝を抱えて座った。

丁度その時、玄関の方から音した。そしてリビングの扉が開くと、両手に紙袋やビニール袋をたくさん持った圭太が入ってきた。

「おはよう、山川さん。って言っても、もうおはようって時間じゃないけどね」

「うん.....おはよう」

「そんなところにいないで、こっちへおいで。山川さんのために、いろいろ買ってきたんだ」

手招きをされ、圭太の元へ行くと、紙袋を渡された。中を見てみると、可愛い洋服が数枚入っていた。

「洋服、独断と偏見で買ってきちゃった。後、生活に必要な日用品も買って来たから」

(私のために、こんなに.....?)

買って来た量からして、相当な出費をした事は明らかだった。

「宮内くん.....こんなに買って、大丈夫なの.....?」

不安そうな面持ちの碧衣に対して、圭太はあっけらかんとした表情をしていた。

「平気。言ったでしょ?お金の事は、なーんにも心配しなくていいんだから。もう山川さんは、余計な事は考えずに、伸び伸びと生活していればいいんだよ」

本当にいいのだろうか?碧衣の胸に不安が過るが、もうあんな日常を過ごさなくていいのかと思うと、心は驚く程に軽かった。

「お腹、空いたでしょ?ご飯にしようか。すぐに支度するから、その間に身だしなみを整えておいで」

ようやく碧衣は自分が寝起きのままの姿である事を思い出し、恥ずかしくなった。もっとも、圭太の方はあまり気にも留めてないようだった。

洗面所で身だしなみを整え、圭太が買ってきた水色の丈の長いワンピースに着替えてリビングに戻ると、テーブルの上には2人分のパスタが用意されていた。

「山川さん、これからの事なんだけど……」

昨日と同じように向かい合って座り食事をしていると、圭太が唐突に話を持ち出してきた。真面目な話だと、空気を感じ取った。

「キミはもう、学校に行かなくていいよ。家にも一生、帰らなくていい」

「……！」

「キミはずっとずーっと、ここにいればいい。もちろん、働かなくてもいい。一生僕が養ってあげるから」

「宮内くん……」

「だから……な一んにも、心配しないで」

フォークを置いて、右手で碧衣の頬に触れる圭太の表情は、薄笑いを浮かべており、怖いくらい不気味に見えた。

(学校にも行かずに、働きもせずに、ずっと養ってもらって……まるで、ヒモだ)

頬に触れていた圭太の手を振り払い、碧衣は立ち上がり、少々取り乱したように声を上げた。「待ってよ、宮内くんっ！確かに気持ちは嬉しいけど、そこまでしてもらう義理なんかはないはず。昨日、私に惹かれたとか言ってたけど、私は宮内くんは何もしてないし……惹かれる要素なんかはないし……養ってもらっても、恩返しとかできないかもしれない……」

急過ぎる展開に頭は追いつけず、混乱して感情が高ぶってしまう。

この世の中に、こんなおいしい話があるわけない。ましてや碧衣は、無情な世の中に息苦しさを覚え、軽く絶望していた身だ。もしかしたら後で、ものすごい見返りを求められるかもしれない。そう思うと、なんだか怖くなってきた。

「あははっ！どーやったらそんなネガティブ思考になるの？深く考え過ぎだって！もっと軽く考えなよ」

真剣な碧衣に対し、圭太は明るく笑っていた。ひとしきり笑った後、圭太は軽く微笑み口を開いた。

「今まで、窮屈な暮らしをしてきたんでしょ？これからは、余計な事は考えないで、ここで気楽に暮らしなよ。もちろん、僕は極力、山川さん……碧衣ちゃんに窮屈な思いはさせないようにするよ」

(碧衣ちゃんって……)

突然の下の名呼びに照れつつも、碧衣はつい「よろしくお願いします……」と呟いた。

こうしてスタートした奇妙な同居生活。

圭太に言われた通り、碧衣は学校に行かなくなった。学校には行かず、1日中ずっと広い家の中で過ごした。以前とは比べ物にならないくらい、穏やかな生活だった。

一方の圭太は、時折、学校の方に出向いていた。とはいえ、午後から行ったり、途中で勝手に早退してきたりと、自由気ままな登下校スタイルだ。

そして碧衣は、家で掃除をしたり、テレビを見たりと、穏やかではあるが少し時間を持て余しつつあった。

一緒に生活をするようになって、流れるように一週間が経過した。一週間、彼と暮らして碧衣は疑問に思う事があった。それは彼の両親が一向に家に帰ってこないという事だ。いくら多忙な人でも、全く帰ってこないのは不自然過ぎる。だからといって、その疑問を圭太にぶつける勇気もない。

圭太は伸び伸びしてくれればいいと言ってくれたが、仮にも他人の家で、居候の身でもあるので、碧衣が行き来する部屋はベツルームと自分の部屋とリビングだけだった。本当は、広い家の中を探検したいと思っているが……。

「ただいまー」

この日は、圭太は珍しく朝から学校に行き、帰ってきたのは夕方だった。リビングにいた碧衣は出迎えるために、玄関へと足を急がせた。

「お帰りなさい……」

「うん。ただいま」

圭太は目を細めて、優しく微笑んだ。碧衣は「この笑顔……好き、かも」と秘かに思った。

「あー、やっぱり朝からだと疲れる……しんどい……」

リビングに入った途端、圭太は倒れ込むようにソファにダイブした。

「宮内くんは、ゆっくりしてて……ご飯は、私が作るから」

夕飯は、一緒に作るという決まりになっている。1人で台所に行こうとする碧衣を、圭太は腕を掴んで引き止めた。

「一緒に、作る？碧衣ちゃんも、ここに座りなよ」

促され、隣に座り、碧衣は何か会話しないと、と思い「学校、どうだった？」と話題を振った。

「特に変わらない。疲れるだけの場所だった……後、女王様気取ってる女がいて、鬱陶しかったな」

その単語を耳にして、碧衣は瞬時に思った。それは恐らく、九条世良の事であると。

「おまけに、大人しいタイプの子にあれこれ命令して、こき使ってた。僕、あーいう女って嫌いだな」

「……そう」

碧衣が学校に行かなくなっても、世良は相変わらずのようだ。きっと、自分が学校に行かなくなった事など全く気にしてないのだろう、と碧衣は少し怒りを覚えた。

「確かあの女、九条世良って名前だったな。碧衣ちゃんは、大丈夫だった？」

「え？」

「今まで、あの女に何かされたりしなかった？例えば、パシリとか……」

「っ……」

圭太はわかって聞いてるのだろうか。確かに碧衣は1年の時から散々、世良にパシリされ、罵られてきた。世良を恨んでないといえば、嘘になる。だからといって、過去にされてきた仕打ちを圭太に気安く話してしまってもいいものだろうか。

「きっと九条は、1人だと何にもできないタイプの女だと思うよ。周りにはいる取り巻き達と一緒に、平気で弱い物を汚い言葉で責めて追い詰め、時には攻撃を与えて苦しめる、卑劣で下品な奴だ」

圭太が吐いた汚い言葉に、碧衣は圧倒された。しかし、こころなしか胸がスーッとなくなっていくのを感じた。

(確かにその通りだ……九条さんは、卑劣な人間だ。私は何も悪い事してないのに……いつもいつも面倒な事を押し付けて、馬鹿にして……蔑むような目で私を見下す……)

胸の中にモヤモヤとした感情が溜まってくる。次第に碧衣は胸が苦しくなり、吐き出さずにはいられなくなってしまった。

「私だって……散々、奴隷みたいに、扱われた……」

膝の上で手を握り締め、微かに体を震わせ、俯きながら小さな声で話す碧衣を圭太はただ黙って見つめ、ソファから立ち上がったかと思えば「夕飯の用意、しようか」と何事もなかったように言った。そして、思い出したように……。

「あ、そうだ。碧衣ちゃん、もう学校は退学してる事になってるから」

とんでもない事を言ったのだった。

「えっ、い、いつの間に……」

「もう行かないんだから、問題ないでしょ。むしろ碧衣ちゃんは、学校が大嫌いみたいだしね」

圭太の言った事は、間違っていない。凶星のど真ん中を突いていた。

「……うん。嫌いだよ」

気づけば、本当の事を言ってしまうていた。

「九条世良の事だって……本当は、大嫌い……」

聞かれてもないのに、碧衣は無意識のうちに本音を口走っていた。こんな事を言うのは良くないとわかっているけど、圭太に本音を聞いてほしい、と何故かそう思う自分がいた。

「……そっか」

圭太は特に動じる事はなく、冷静だった。

それから数日後。相変わらず、何事もなく平穏に時間は過ぎていた。しかし平穏は長くは続かなかった。突然、衝撃的な事が起きたのだった。

「碧衣ちゃん、ご飯が終わったら、一緒に地下室に来てもらっていいかな？」

「地下室に……？いい、けど」

夕飯の最中、急にそう言われたのだ。実は圭太の家には地下室があるが、碧衣は一度も立ち入った事がない。

「でも少しだけ、心の準備をしないとの方がいいかもね」

意味深な事を言われ、碧衣は少し不安を覚えた。

この頃、どういう訳か、圭太は学校に朝行って、夕方に帰ってくるといった生活が続いている。あんなに不定期登校だったのに、と少々不思議に思っていた。

おまけに昨日は、夜に誰かを家に招待したようで「お客さんが来るから、部屋にいてくれる？」と言われたのだった。

圭太にだって都合がある。気になっても、あえて深追いしないようにした。

夕飯を終えると、圭太は碧衣に「これを着て」と、白いワンピースを渡された。

「僕は後ろを向いて、目をつぶってるから、さっさと着替えちゃって」

「どうして着替える必要があるの？何か、するつもりなの？」

「大丈夫。キミは何も、不安に思う事はない。大丈夫だから……碧衣ちゃん」

強く「大丈夫」と言われ、碧衣は大人しく着替えた。

「着替えたよ……」

「じゃあ、行こうか。こっちだよ、碧衣ちゃん」

手を引かれ、リビングを出て、広い廊下を進み、辿り着いたのは突き当りにあるドアの前。どうやらここが地下室への入り口らしい。

圭太がドアを開くと、階段が地下へと続いていた。入口にあるスイッチを押すと、電気が点いて明々と暗い地下室を照らした。

「さ、おいで」

大人しく階段を下りると、そこには驚くべき光景が広がっていた。

「っ!!!!な、何これっ……」

「……びっくりしたかな？碧衣ちゃん」

「どっ、どう、してっ……」

地下室の真ん中には、手術台のような長方形の大きなテーブルが置いてあり、その上には人が縛り付けられていた。

その縛り付けられている人物は、碧衣もよく知る人だった。

「九条、世良……」

台に縄で縛り付けられているのは紛れもなく、碧衣を奴隷のように扱ってきた九条世良だった。口にはガムテープが貼られているので、しゃべる事ができず「んっ、んっ」ともがくような声を出している。

「宮内くんっ……どういう事？」

「そんなに驚かないで。だってキミは、この女の事が大嫌いなんでしょ？憎んでるでしょ？いままで酷い扱いを受けてきたみたいだし……復讐してやりたいよね？」

後ずさる碧衣の肩を、圭太は抱いて、世良のそばへと誘導した。

床には大きい刃の包丁、斧、ノコギリ、鋭く尖ったナイフなど物騒な凶器が並べてあった。

「さあ、碧衣ちゃん、この女を存分に痛めつけてやりな。復讐するんだ。」

「っ……」

「碧衣ちゃんのために、僕はがんばったんだよ？この女を捕らえるために、朝から学校に行って、なるべく誰も見てないところで接触して、親しくなったフリをしたんだ。このクソ女、ちょろかったよ。僕がちょっと色目を使っただけで、簡単に心を許しちゃうんだから」

この頃、圭太が真面目に登下校していた理由が今、ようやくわかった。昨日も、家に来ていた客人の正体は世良だったんだ。

「そして昨日、家に来ない？って言ったら、あっさりOKしてくれてさあ。睡眠薬入りの紅茶を飲ませて、捕らえる事に見事、成功したってわけ」

この状況で、圭太は平然としていた。碧衣は動揺せずにはいられない。

圭太は佇む碧衣の手に、ナイフを握らせた。

「さあ、思い切ってやるんだ。キミは今まで、この女に何をされてきた？」

「何をって……だから、パシリされて……罵られて……」

「この女の事、許せないでしょ？本当は、死んでしまえばいいって思ってるんじゃないの？」

ドクン、と碧衣の鼓動が大きく音を立てるのがわかった。

「この女は、キミに今までしてきた事なんて全く反省してない。きっとこの先も、同じ事を繰り返す。改めて思い出してごらん？キミはこいつに、今まで何をされてきた？」

ナイフを握る手に力が入った。

碧衣は今まで、世良にされてきた事を思い出した。

(私は、九条さんに何も悪い事なんかしてない……何もしてないのに、面倒な事をいっつも押し付けられて……悪口言われたり、嫌がらせされたり……私はただ、普通の平穏な学校生活を送りたけだけだった……なのに全部、潰された。この女のせいで、私の学校生活は滅茶苦茶にっ……)

胸の奥に湧き上がって、溜まっていく、モヤモヤとしてドロドロとした感情。

力を込めてナイフを握り、思い切り振り上げた。そしてそれを、世良の右目に突き刺した。

「んっ!!んんっー!!」

右目に深々とナイフが刺さり、世良はひときわ大きな声を上げた。まるでそれは断末魔の叫びのようだった。

「嫌い……嫌いよ……」

次に碧衣は包丁を手にした。

その包丁でまずは、世良の頬を切った。包丁で世良のメイクをばっちり決めた顔を切り裂いた後は、腕、お腹、胸、足など体のあらゆる箇所を切った。そのたびに世良は苦痛に顔を歪ませ、声を上げた。

碧衣の着ていた真っ白だったワンピースには、赤い血飛沫が飛び散っていた。

目の前にいる世良は切り傷だらけで、痛々しい姿になっていた。でも碧衣は何とも思わなかった。むしろ、思った以上に自分が世良を憎んでいた事を改めて知った。

「そろそろ、仕上げにする？」

黙って見ていた圭太はそう言って、碧衣に斧を渡した。

斧を渡された碧衣は、それで躊躇する事なく世良の首めがけて振り下ろした。振り下ろされた斧は、世良の首に深々と刺さった。同時にたくさんの返り血が碧衣の衣服を赤く染めた。

世良は息絶え、死んでしまった。

「……大嫌い」

そう吐き捨て、碧衣は力が抜けたように、その場に座り込んだ。

とんでもない事をした。自覚はあったが、碧衣の胸は晴々していた。溜まっていたモヤモヤした気持ちが、一気に軽くなった気分だった。

(こんな事して……もう私は、普通に戻れない)

どんな相手でも、これは殺人。この先、もう平穏な暮らしはできない、普通の生活には戻れないだろうと碧衣は思った。

「お疲れ様、碧衣ちゃん。とても素敵なショーだった」

脱力する碧衣を、圭太はただ優しく抱きしめた。

「宮内くん……私、人を……」

「大丈夫。死体の処理は任せて。こんな女がいなくなっても、困る奴なんかいるわけないし」

(いなくなっても、困る人がいない、か……)

もしも、仮に自分がこの世界からいなくなってしまうたら。きっと、困る人なんかどこにもいないだろう。

圭太の腕の中で、碧衣は秘かにそう思い、勝手に切なくなった。

【第3章へ続く】